

山彦響め鳴かましやそれ

——「惜不登筑波山歌」の発想——

菅 原 準

一

惜^レ不^レ登^二筑波山^一・歌筑波根^{つくはね}尔^に吾^{わが}行^{ゆけり}利^せ世^{はと}波^き霍^す公^{やまび}鳥^{こと}山^{よめ}妣^な児^か令^{まし}響^や鳴^{それ}麻^も志^も也^も其^も

(巻八、一四九七)

右一首、高橋連虫麻呂之歌中出。

高橋虫麻呂には二篇のほととぎすの歌がある。その一つは「詠^二霍公鳥^一」長反歌(巻九、一七五五・一七五六)であり、もう一つは右に掲げた「惜^レ不^レ登^二筑波山^一歌」と題された短歌である。私は別稿において、「詠^二霍公鳥^一」は人々に別離の悲しみをもたらす鳥としてのほととぎすを詠じた歌であろうことを述べた。^(注1)本稿ではこれに關連して、「惜^レ不^レ登^二筑波山^一歌」の歌意と、そこからうかがわれる歌人・虫麻呂の性格について述べてみたい。

二

この歌の末句「鳴かましやそれ」の解釈は、「鳴きもしようか、鳴いたに違いない」とする推量説（『代匠記』精・『全註釈』・『窪田評釈』など）と、「鳴いただろうか、いや鳴かなかっただろう」とする反語説（『略解』所引宣長説・『古義』・『口訳』・『全釈』・『総釈』・『金子評釈』・『古典大系』・『古典全集』など）とに分かれていた。だが金井清一氏が、集内における助詞「や」が文末にあつて推量の助動詞に接続した諸例を調査して、これらは「ほとんどすべて反語法であると言つてよい」と結論し、当面の歌も反語法で解釈すべきであるとした。^{（注2）}この金井説以後の諸注の解釈を概観してみると、まず『古典集成』は「や」を疑問としながらも、「聞けなかつたのを残念としながら、自分が行つたら鳴かなかつただろう、と相手に花をもたせた言い方をしたのか」と反語的に解している。「や」を『全註』と『和歌文学大系』は反語的疑問とし、『新編全集』は反語とする。『釈注』は「歌の相手に対する疑問だが、私が行つたら鳴かなかつたでしょうの余意を含む」と述べている。推量説を採る注釈書はない。反語的解釈は今日、ほぼ通説化しているといつてよいであろうが、^{（注3）}「まし」に「や」が接続した例は、集内にはこの一例のみであるので、後代の例も一応は検討しておかなければなるまい。八代集には、当該歌と同じく「……ば——まし」の形をとる反実仮想の「まし」に「や」が接続した例が十六首ある。以下にその歌々を掲げる（歌番号は『新編国歌大観』に拠る）。

① 吹風と谷の水としなかりせば深山がくれの花を見ましや
（古今集）卷二、一一八

② 心こそうたて憎けれそめざらばうつろふ事もおしからましや
（古今集）卷十五、七九六

③ 住吉の我が身なりせば年ふとも松より外の色を見ましや
（後撰集）卷九、五九七

④ 暁のなからましかば白露のをきてわびしき別せましや

〔後撰集〕卷十二、八六二・〔拾遺集〕卷十二、七一五

⑤ 君が名の立にとがなき身なりせばおおよそ人になして見ましや

〔後撰集〕卷十二、八八〇・〔拾遺集〕卷十二、七〇七

⑥ 草枕紅葉むしろにかへたらば心を碎く物ならましや

〔後撰集〕卷十九、一三六四

⑦ 心からものをこそ思へ山桜たづねざりせば散るを見ましや

〔後拾遺集〕卷二、一四一

⑧ 世の常に思ふ別れの旅ならば心見えなる手向せましや

〔後拾遺集〕卷八、四六七

⑨ こひしさのうきにまぎるゝものならばまたふたゝびと君を見ましや

〔後拾遺集〕十四、七九二

⑩ はし／＼らなからましかば流れての名をこそ聞かめ跡を見ましや

〔後拾遺集〕卷十八、一〇七二

⑪ 咲かざらばさくらを人のおらましやさくらのあたはさくらなりけり

〔後拾遺集〕卷二十、一二〇〇

⑫ うたゝ寝の夢なかりせば別れにし昔の人をまたも見ましや

〔金葉集〕卷九、五五三

⑬ 吹きかへす鶯の山風なかりせば衣のうらの玉をみましや

〔金葉集〕卷十、六三四

⑭ 春をへて花散らましやをく山の風をさくらのこころとおもはば

〔千載集〕卷二、八六

⑮ 月の色に心を清くそめましや宮こを出でぬわが身なりせば

〔新古今集〕卷十六、一五三四

⑯ 浅茅生をたづねざりせばしのお草思ひをきけん露を見ましや

〔新古今集〕卷十八、一七三五

これらはすべて、「もし……なら——だろうか」という語法をとっている。このうち、⑤のみは反語と断定しにくいように思われるが、他の十五例は反語法で解釈すべきものと見てよいだろう。したがって当該歌の「鳴かましやそれ」も、「鳴いただろうか、いや鳴かなかっただろう」と反語的に解釈するのが妥当であると確認される。

さて、これが反語的に解釈すべきであると定められるなら、次には、なぜ虫麻呂はこのような歌い方をするのか、なぜ「自分が行ったら山彦を響めて鳴かなかつただろう」と考えるのか、という疑問が浮かび上がる。しかし、この点について言及しているといえる注釈書は、わずかに『古義』と『全釈』の二書のみである。『古義』は、

歌ノ意、此は、つくばねに登りし人の返り来て、ほと、ぎすの云々鳴しとかたるを聞て、さてさて共に登りたらむには、きくべきことなるに、遺憾ウツミシきことかな、さはいへど、かく物のふさはぬ身なれば、又我ガ登りたらむには、存外さやうに其レ鳴ましやは、鳴はすまじ、といふならむ

と説く。『全釈』は訳文に、

トテモ私ノヤウナ運ノ悪イ者ガ行ケバ、ヤハリ郭公ハ鳴カナイダラウ。

と付している。だが虫麻呂が自分を「物のふさはぬ身」とか「運ノ悪イ者」と考えていたことに根拠はない。

他の諸注は、いずれもこの点を問題としていない。最も通行している解釈は、登山しなかつたことを残念としながら「私が行ったら鳴かなかつただろう」「私が行かなかつたから鳴いたのだろう」と戯れた歌とか、相手を持ち上げた歌とするもので、『金子評釈』・『古典全集』・『古典集成』・『釈注』などがこれに当たる。なお、金井氏は、

自分だけが願望が達せられないという危惧、自分だけの挫折を予測して明瞭に被疎外者の意識を示している。(中略) 貴族社会におけるわが身の位置を知り、彼の歌を享受する上級貴族とは畢竟異質であると悟るところに彼の疎外感が生じるのである。^(注4)

と述べている。虫麻呂が貴族社会の中での疎外感を抱いていたとすることは、彼の文学を考えるにあたり興味深い指摘である。だが、当該歌の歌句に即してそれを証明するのは困難であろう。

従来の解釈は、ここにほととぎすが「山彦」を「響」めて鳴いただろうかと歌われることの意義に、十分に注意を

はらっていなかったように見受けられる。集内に、この歌と同じく鳥獸が「山彦」を「響」めて鳴くことを歌った歌は以下の五首（ただし(3)は(2)の反歌であり実質的には四首）があり、これらの歌には、ある類型が存する。これを手掛かりとすれば、歌意はおのずと明らかになる。

(1) 山妣やまびこのあひとよみまで姑乃相響あひとよみまで左右妻恋ひに鹿鳴く山辺に独りのみして (巻八、一六〇二)

(2) 三諸の 神辺山に 立ち向ふ 三垣の山に 秋萩の 妻を枕かむと 朝月夜 明けまく惜しみ あしひきの 山響やまびことよめ令動 呼び立て鳴くも (巻九、一七六一)

(3) 明日の宵逢はざらめやもあしひきの山彦令動やまびことよめ呼び立て鳴くも (巻九、一七六二)

(4) 大夫の 出で立ち向かふ 故郷の 神名備山に 明け来れば 柘のさ枝に 夕されば 小松が末に 里人の 聞き恋ふるまで 山彦乃やまびこのあひとよみまで 答響あひとよみまで萬田 霍公鳥 妻恋ひすらし さ夜中に鳴く (巻十、一九三七)

(5) 夜を長み寝のねらえぬにあしひきの山妣故等余米やまびことよめさ牡鹿鳴くも (巻十五、三六八〇)

(1)~(4)は、すべて鹿やほととぎすが離ればなれになっている妻を求めて鳴き、同じ境遇に置かれている作者の悲しみをかきたてることを歌ったものである。残る一例、(5)も、同じ「引津亭舶泊之作歌七首」という題詞に統括される歌群の、

妹を恋ひ寝のねらえぬに秋の野にさ牡鹿鳴きつ妻思ひかねて (巻十五、三六七八)

の二首後にあることを見れば、やはり同じ類型に属するものと考えて間違ひなからう。これらの歌々から、鹿やほととぎすが「山彦」を「響」めて鳴くことを歌うのは、妻との距離的な隔絶感を表現したものであることが明らかである。そうなると当面の虫麻呂歌の「山彦響め」も、ほととぎすが妻を求めて鳴いて聞く者の共感を誘い、恋心をつのらせることを歌ったものと考えざるを得ない。つまり一首は、「筑波山に自分が行ったら、ほととぎすは妻を求めて

鳴いたかどうか、いや鳴きはしなかっただろう」と解すべきものであることになる。虫麻呂がこのように歌ったのは、彼には恋い慕うべき妻がいなかったからではあるまいか。そしてその劣等意識を逆手にとり、「妻をもたない自分の前では、ほととぎすも妻を求めて鳴いて共感を誘ったりしなかっただろう」といつて、聴き手の笑いを誘ったものと考えられる。この歌はおそらく、筑波山に登り、ほととぎすの声を聞いて家郷に残した妻に対する思慕の情を新たにした人々を聴き手とする、宴席での座興の戯笑歌であつたろう。

三

ここに想起すべきは、しばしばいわれるように虫麻呂には女性を願望する心を詠んだ歌が多いことである。^(注5)

級照る 片足羽川の さ丹塗の 大橋の上ゆ 紅の 赤裳裾引き 山藍もち 摺れる衣着て ただ独り い渡らす児は 若草の 夫かあるらむ 檀の実の 独りか寝らむ 問はまくの 欲しき我妹が 家の知らなく

(巻九、一七四二)

大橋の頭に家あらば心いたく独り去く児に屋戸貸さましを^(注6)

(巻九、一七四三)

三栗の那賀に向へる曝井の絶えず通はむそこに妻もが

(巻九、一七四五)

遠妻し多珂にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし

(巻九、一七四六)

い行き逢ひの坂の麓に咲きををる桜の花を見せむ児もがも

(巻九、一七五二)

右のうち、「那賀郡曝井歌」(一七四五)、「手綱浜歌」(一七四六)の二首については、「望郷」のように解する向きもあるが(『古典集成』・『釈注』など)、中西進氏が「那賀郡曝井歌」について、妻とよぶべき存在がそこにいてく

れたらよいという解釈が虫麻呂の一般であると述べ、^(注7)「手網浜歌」についても、このような歌いぶりは多珂も手網も一つの地域と見なされるような条件の中、すなわち国府での詠であること、題詞にその地で作ったことを示す「作」がなく、題詠の歌と見られること、「遠くに残したあの妻が多珂にいたら」という解が成り立つためには、虫麻呂がこの地になければならぬことを説いた上で、「やはり遠妻は『遠方の妻』の意で、かりに想定した女性であろう。というのも、ここにまた女から妻へというルートが歌われていると考えるからである」と述べているように、^(注8)両歌とも地名に興じて、仮に想定した「妻」を願望して見せた歌と解するべきであろう。

「那賀郡曝井歌」については、『新編全集』に「モガ(モ)は願望を表すが、『見む人もがも』(八五〇)、『着せむ児もがも』(二三四四)などのように、一般にその対象を特定しない」と述べているが、このことも、虫麻呂にはそこにいてほしいと願う特定の妻など存在しなかったものであり、これは仮に想定した「妻」であるという解釈を支える。また「手網浜歌」は、「遠妻^し多珂にありせ姿^ば」のように、助詞「し」が接続助詞「ば」と呼応して仮定条件を示している。「し」は一般に強意を表わすとされているが、『古典大系』(巻二十、四四八三補注)は「し」の諸例を精査して、その意味の基本は控え目な主観性の表明であることを説いている。それによれば、「し」の用例中、「し……ば」という呼応の関係を示すものは約五割を占め、その内の仮定条件を示す用法は、「自分にはこんな場合が自然に頭に浮かぶのだが、もし……ならば」というのがその原義であるという。^(注9)この「し」の意を踏まえて歌を訳すなら、「遠妻」——そのような名のつくものを、私めも一度でいいからもってみたいものですが——それがもし多珂にありましたなら、それはもう、道は知らなくても、手網の浜の名のように、たづねて行くでしょうな」のごとくになるであらう。この両歌も戯笑歌であったと見て間違いないまい。「惜^し不^レ登^二筑波山^一歌」と同じく、妻をもたないことを前面に立てた、虫麻呂の一つの芸のあり方を示すものとして注目される。「見^二河内大橋独去娘子^一歌」長歌(一七

四二)においても、夫がいるのかどうか、家がどこにあるのかも分からない年若い女性を「我妹」と呼ぶところに諧謔がある。

なお、戯笑性、諧謔性の感じられる作ではないが、「見」武蔵小埼沼鴨「作歌」についても、女性を願望する心を内在させた歌とする説がある。

埼玉の小埼の沼に鴨そ翼切る 己が尾に降り置ける霜を掃ふとにあらし

(巻九、一七四四)

この歌は一見したところ、鴨の生態を客観的に描写した叙景歌にしか見えないが、本田義寿^(注10)・中西進^(注11)両氏はこれを、鴨が霜を掃う姿を雌雄の鴨の愛の行為と受けとめた歌であろうとしている。本田氏は、巻一、六四・巻三、三九〇・巻十四、三五七〇・巻十五、三六二五などの鴨の歌のありようから、虫麻呂は鴨が霜を掃う姿から「その妻への思いだけでなく、妻の虫麻呂への愛をも含めて、あいよる二人の愛を印象したのではなかっただろうか」、「その寒い夜の鴨の姿にことよせた抒情は、万葉にあつてひたすらに愛を歌うのである」と説く。中西氏も、上掲の歌々に巻十二、三〇九〇・三〇九一などを加え、「鴨といえは行動を共にし共寝をし、そのゆえに旅人に旅愁を与え手枕を思慕せしめるものだったのである」ことを述べている。中西氏は更に、六四などが《葦辺の鴨》を歌ったものであるのに対し、《沖の鴨》の歌(巻十一、二八〇六・巻十四、三五四・三五二七)がいずれも一人でいることの苦しさを歌うものであることを説き、「虫麻呂の一首をふくめてすべての鴨の歌が理解できるように、くわしく鴨の生態を歌ってくれた一首」として、

夕されば 葦辺に騒き 明け来れば 沖になづさふ 鴨すらも 妻とたくひて わが尾には 霜な降りそと 白

妙の 羽さし交へて 打ち払ひ さ寝とふものを……

(巻十五、三六二五)

を掲げ、「もし虫麻呂の歌を類型からはずれた狷介な歌とするのでなければ、『己が尾に降り置ける霜を掃ふ』のは、

白妙の羽さし交えた雌雄の鳴だと考えざるを得ない。少なくとも、そう了解しながら虫麻呂は羽音を聞きとめていたことになる」と述べている。つまりこの歌の主題は、三六二五などと同じく独り寝の寂しさにあり、その点では右の虫麻呂の女性を願望する歌々に通じる作であるともいえよう。本田氏はこれを、虫麻呂とその妻との愛を印象しての詠としているが、この歌には「大和し思ほゆ」(六四)、「汝をは偲はむ」(三五七〇)のように家郷、手枕の連想は歌われておらず、妻の存在は明確ではない。右に見たような虫麻呂歌の一般的傾向からすれば、やはり虫麻呂には偲ぶべき妻はいなかったと見るのが穩当ではあるまいか。ただしこの歌は、作者がひとり、孤独な心情を述懐した趣のあるもので、戯笑歌としてあつたものとは思われない。「詠「霍公鳥」」長反歌にも通じる、虫麻呂の孤愁を表出した歌といえよう。

四

「惜_レ不_レ登_二筑波山_一歌」に戻ろう。この歌のほととぎすは、妻を求めて鳴き、聞く者に、家郷に残した妻への恋心をつのらせる鳥として発想されていた。虫麻呂の二篇のほととぎすの歌、「詠「霍公鳥」」長反歌と「惜_レ不_レ登_二筑波山_一歌」とは、作風は全く異なるものの、ともに別離の悲しみをもたらす鳥としてのほととぎすを詠じた歌であることになる。

虫麻呂は、おそらくは宴席で聴き手の笑いを誘うべく、「自分が行ったら、ほととぎすは妻を求めて鳴きはしなかつただろう」と歌った。だが、果たしてこれは虫麻呂の本心であつたのだろうか。本心であるなら、虫麻呂はなぜこの歌を「惜_レ不_レ登_二筑波山_一歌」と題したのか。^(注12)

「惜_レ不_レ登——」とは、登つたら得られたであろう感興、すなわち山上でほととぎすの鳴くのを聞いて得たはずの感興を得られなかったことを「惜」しむという意に違いない。つまり虫麻呂はほととぎすの声を聞けなかったのを残念としながら、「自分が行つたらほととぎすは鳴かなかつただろう」と歌っていることになる。このように題詞と歌の内容との間に齟齬があることは、これまでも指摘されてきたところである。「鳴かましやそれ」を「鳴きもしようか、鳴いたに違いない」の意とするのも、登山しなかったことを残念としながら「私が行つたら鳴かなかつただろう」と相手を持ち上げた歌とするのも、この齟齬を解決すべく案出された解釈であつたろう。しかし歌意を上述のように見るなら、題詞と歌との関連も、これに沿つて見直さなければなるまい。

この歌のほととぎすが別離の悲しみをもたらすものとして歌われている以上は、登つたら得られたであろう感興とは、この場合、ほととぎすの妻を求める悲声を聞いて、自身の別離の悲しみを新たにすることにほかならない。虫麻呂は登らなかつたために、ほととぎすの声を聞くことができなかった。そしてそのことを「惜_レ不_レ登——」と記している。この題詞を素直に解するなら、虫麻呂はその歌意とは裏腹に、自分が登つてもほととぎすは「山彦」を「響」めて鳴いて共感を求めたであろうと考えていたのであり、登らなかつたためにほととぎすの悲声を聞けなかったのを「惜」しんでいたことになる。このことは、この歌の背景に虫麻呂自身の某人との別離があつたことをうかがわせる。そうでなければ、ほととぎすの悲声を聞けなかつたのを「惜」しいとすることはあり得ないだろう。

しかし、虫麻呂は自身の別離を歌わない。「自分が行つてもほととぎすは山彦を響めて鳴いたであろう」とは歌わない。その理由は、先に述べたように、虫麻呂は妻をもたなかつたのであり、このとき虫麻呂が恋い慕う対象も、自分の妻ではなかつたからだろう。付度するに、それは「見_二河内大橋独去娘子_一歌」(巻九、一七四二・一七四三)に歌われるような、虫麻呂がひそかに思いを寄せる女性であつたのではないだろうか。声をかけることさえままならな

いその女性との「別離」——現実には、実るべくもない片恋——は、自身の胸のうちにのみ仕舞い込むべきことであった。孤愁の詩人は、涙を道化の仮面の下に隠して「自分が行ったら鳴かなかつただろう」と歌わざるを得なかったのである。「惜_レ不_レ登_二筑波山_一歌」という題詞には、その胸中の苦渋が滲み出ているように思われる。

虫麻呂は「詠_二霍公鳥_一」においても、自身の悲しみを直截に歌ってはいなかった。この歌について私は、その背景に某人との悲別があつたであろうが、悲しみを直截には歌わず、ほととぎすの属性を細密に描写する方法がのおずと虫麻呂の孤独を浮かび上がらせることになったのであると述べたが、^(注13)こうした抑制的な表現法も、あるいは右に述べたような事情を反映するものではなかつた^(注14)だろうか。

(二〇〇三年十二月十四日稿)

注

(1) 拙稿「己が父に似ては鳴かず——『詠霍公鳥』の主題——」(『万葉』第百八十号、二〇〇二年五月)

(2) 金井清一「疎外者の文学」(『万葉詩史の論』、一九八四年十一月、笠間書院。初出は万葉七曜会編『論集上代文学』第四冊、一九七三年十二月、笠間書院)

(3) 『講談社文庫』は、この「や」を単に疑問としている。『新古典大系』は、歌を「筑波嶺に私が行っていたら、ホトトギスは山彦を響かせて鳴いたことであろうかなあ、その鳥は」と訳すが、「や」については反語とも疑問とも明記しない。

(4) 注2に同じ

(5) ①清水克彦「伝説歌の成立条件」(『万葉論集』、一九七五年七月、桜楓社。初出は『女子大国文』第二十八号、一九六三年二月、②井村哲夫「若い虫麻呂像」(『憶良と虫麻呂』、一九七三年四月、桜楓社。初出は『万葉』第

六十号、一九六六年七月)、③三谷栄一「高橋虫麻呂」(『国文学 解釈と教材の研究』一九七〇年十月号) など

(6) この歌の第三句は、原文には「心悲久」とある。諸注は「ウラガナシク」「マガナシク」「マカナシク」のいずれかの訓を採るが、宮・細の「ココロイタク」の訓が正しいことを説く坂本信幸「高橋虫麻呂」(『国文学 解釈と鑑賞』一九九七年八月号) に従う。

(7) 中西進「土着願望」(『旅に棲む——高橋虫麻呂論』、一九八五年四月、角川書店。初出は『短歌』一九八四年十月号)

(8) 中西進「待つ女」(注7と同書。初出は『短歌』一九八四年十一月号)

(9) 助詞「し」の語義は、大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』(一九七四年十二月) 付録の基本助詞解説「し」の項にも整理して述べられている。

(10) 本田義寿「高橋虫麻呂伝説歌小考」(『記紀万葉の伝承と芸能』Ⅱ 万葉編、一九九〇年五月、和泉書院。初出は『大阪城南女子短期大学研究紀要』第七号、一九七二年六月)

(11) 中西進「夜、沼のほとりで」(注7と同書。初出は『短歌』一九八四年九月号)

(12) この題詞が虫麻呂歌集中のそれを保存したのではなく、後人の付加であったとすれば、以下の論述は意味をなさない。しかし虫麻呂歌集には「検税使大伴卿登・筑波山・時歌」(巻九、一七五三・一七五四)、「鹿嶋郡荻野橋別・大伴卿・歌」(巻九、一七八〇・一七八二)のように、その作歌事情を熟知する者でなければ記し得ぬ題詞を有する歌がある。また、もしも右の題詞を付したのが万葉集編者であったなら、「大伴卿」の名を明記せずにはいかなかっただろう。虫麻呂歌集は、題詞に人名を記す場合には、「丹比真人」(巻九、一七二六)、「石川卿」(巻九、一七二八)、「宇合卿」(巻九、一七二九)などのように、簡略に氏あるいは名のみを記すのであり、万葉

集編者はその表記を保存することをことわっている（巻九、一七一九左注）。一七二六―一七三七が虫麻呂歌集他人の歌の部であることは、伊藤博（①『万葉集の構造と成立』上、第四章第二節、一九七四年九月、塙書房、②『万葉集の歌群と配列』上、第五章第二節、一九九〇年九月、塙書房。初出は筑波大学『文芸言語研究』一、一九八七年一月）が詳述している。なお、「宇合卿」のように、名に「卿」を付した表記は集中に他例がなく、これは「藤原宇合とよほど親しい関係にあった人の記録と見なければならぬ」ことも、伊藤②論文の説くところである。虫麻呂歌集歌の題詞は、虫麻呂本人の筆になるものと認めてよい。

（13）注1と同じ

（14）金井清一「高橋虫麻呂論 序説」（注2と同書。初出は久松潜一監修『万葉集講座』第六卷、一九七二年十二月、有精堂）は、虫麻呂の作品には、内面的な精神を表現したものと、聴き手の要求を充たすために作ったものがあること、貴族大官のサロンにおいては聴き手の嗜好に沿って歌わねばならぬこともあったであろうことを述べ、「聞き手の好奇心と優越心とを満足させながら、その裏で孤愁の詩人がどういう苦さを感じていたかは知る由もないが、一七四四の小埼沼の鴨の歌や、一七五六の霍公鳥の反歌などは彼の心のあり所を教えるであろう」と論じている。極めて示唆に富む見解である。